外国史学習の意味と意義

―子どもと女性の視点から世界と日本を考える―

岩　本　裕　子※

要約

2020年度に本学は改組され現代社会学科を新設する。現代社会学科では、中高社会科教諭資格取得が可能となる。歴史嫌いでは難しいが、中高社会科免許取得をめざす2020年４月以降の新入生は、歴史を積極的に学ぼうという姿勢があるだろう。彼らにどのように外国史教育をしていくか、本稿はその「試作」である。2018年春に新高等学校学習指導要領が発表され、必修の歴史総合と日本史・世界史探究とされた2022年度から始まる新しい高校歴史教育の具体像が示された。近現代の世界史と日本史を統合した「歴史総合」が新設、必修になる。

「生きる力」を強調する新指導要領において、本稿が対象とする「外国史」相当の「歴史総合」で「生きる力」はどのように具体化されるだろう。本稿では、弱者（子どもと女性）からの視点、およびノーベル平和賞受賞理由である戦争や紛争、武器、核兵器、環境破壊に着目して21世紀を読み込み、外国史学習の意味と意義を明らかにする。

キーワード　外国史学習、弱者、ノーベル平和賞、国連高等難民弁務官事務所

目次

１．はじめに
２．弱者から知る現代世界
　２．１　飢餓と子ども―ユニセフ親善大使の役目
　２．２　イスラム教徒の女性たち―マララの場合
　２．３　武力紛争と女性―1990年代の成果と21世紀への語り継ぎ
３．ノーベル平和賞から読み解く21世紀
　３．１　平和を追求した女性受賞者たち
　３．２「武器としての性暴力」の意味
　３．３　核兵器廃絶への遠い道のり
　３．４　環境破壊防止のゆくえ
４．おわりに

註

[項目別参考文献（絵本含む）及び映像]
[付録：2017年ノーベル平和賞受賞（サーロー節子）スピーチ全文]

※浦和大学　こども学部

１．はじめに

本学こども学部は、保育者・幼稚園教諭養成校としてこども学科創設10年目に、小学教諭育成を目標とした学校教育学科を新設した。2019年度には、こども学科は13期生を、学校教育学科は３期生を迎えた。この１年後、日本中が東京オリンピックに沸くであろう2020年度には、現在の総合福祉学部は社会学部と改組され、現代社会学科が新設される。現代社会学科では、中高社会科教諭資格取得が可能となる。新学科成立によって本学では、幼保小中高という一貫した教育者養成が可能になるのである。

文部科学省「学習指導要領」によって教育が展開される幼保小中高とは異なり、大学教育では、大学教員に委ねられた教育が許され、「学問の自由」と同時に「教育の自由」も存在する。1991年に浦和短期大学英語科に異動してきた筆者は、「歴史は暗記」と思い込み、歴史を嫌う学生に映像（映画やドキュメンタリー）を用いて歴史を講義してきた。「瓢箪から駒」で映画を通してアメリカの歴史と文化を学ぶ教科書『スクリーンで旅するアメリカ』[1]を1998年に出版した。さらに、こども学部創設以来、創設メンバーの一人として、英語嫌いを公言する学生に英語科目を教えてきた。「英語が好き」だった英語コミュニケーション科（2003年度改称）学生への教育とは全く異なる「手法」を編み出し、「英語は必要」「英語は保育現場で外国人親子と向き合う重要な意思疎通言語（communication tool）」と理解させてきた[2]。

歴史嫌いな学生では社会科教員免許取得は難しいだろうが、中高社会科免許取得をめざす2020年４月以降の新入生は、歴史を積極的に学ぼうという姿勢があることに期待したい。彼らにどのように外国史教育をしていくのか、本稿はその「試作」である。2018年春に新高等学校学習指導要領が発表され、必修の歴史総合と日本史・世界史探究とされた2022年度から始まる新しい高校歴史教育の具体像が示された。近現代の世界史と日本史を統合した「歴史総合」を新設、必修にするとのことである。「生きる力」と称された新高等学校学習指導要領において、本稿が対象とする「外国史」に相当する「歴史総合」で、どのように具体化されるのだろう。

大学や高等学校の壁を超えた「高大連携歴史教育研究会」[3]を2015年８月に発足させ、歴史教育実践の交流や意見交換を恒常化させ、必要な改革提言をまとめていこうとする動きが進んでいる。2015年５月14日に130人近い大学教員と高校教諭による「呼びかけ」によって結成された。全国の関連団体とネットワークを構築しながら、歴史教育を高大連携を通じて刷新していこうとする試みが、「歴史は暗記」と思い込んで受験勉強をしている高校生の意識改革となることを願ってやまない。

同研究会の初代会長であった油井大三郎が「転換期の歴史教育と東アジアの歴史対話」と題する論文を『世界』（2019年３月号）に発表した。前述下線部分はここからの引用だが、冒頭はこのように始まっている。

日本の歴史教育は大きな転換点を迎えている。「日本史」と「世界史」の統合と、暗記科目から考える科目へ、という二重の転換である。（中略）この新科目「歴史総合」では従来のような「通史」ではなく、「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」「グローバル化」という大項目に沿ったテーマ史を教えることになる。（中略）それは戦後日本の歴史教育の悲願であった。（中略）戦後日本人の歴史認識に大きな問題を引き起こしてきた。

上記のように始まる油井論文は、第１章「世界史」と「日本史」の断絶、第２章「歴史総合」の可能性、第３章東アジアを場とする「歴史総合」の開発、第４章対話の接点としての「二〇年代」評価、と展開されたのち、以下のように結ばれている。「新必修科目の『歴史総合』の作成を、東アジアの近現代史に重点を置いて世界史と日本史を統合し、将来を担う若者が共存可能な東アジアの担い手に育つような機会とすることを期待したい」と[4]。

筆者はこども学部で12年間「歴史入門」を講義してきた。シラバス授業内容の一部を再録する。「21世紀を迎えた地球の現状（環境問題、民族や宗教紛争、貧困問題など）を見る上で、原因究明や解決方法模索のためには歴史を学ぶ必要がある。『戦争の世紀』といわれた20世紀から平和を志向した21世紀に入ったにも拘わらず起こった『９月11日』以来、合衆国ばかりか世界が変わったと言われる。世界の歴史を考える上で、アメリカ史を通して歴史を学んでいく」と説明した。教科書は拙著『スクリーンに投影されるアメリカ』だが、講義前半ヨーロッパ史の部分を活字にして、受講生の参考文献とするために、講義録「西洋精神の起源をめぐる一考察：映像に描かれた聖書・神話・伝説」[5]を残した。

新学習指導要領の基本的考え方は、子どもたちの「 生きる力」を育むということである。幼小中高において「生きる力」を身につけるとは、言い換えれば「変化の激しいこれからの社会」で生きる力を身につける必要があるということだろう。高校世界史の指導目標は「近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき、地理的条件や日本の近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」[6]とされている。

「生きる力」を身につけ、国際社会で主体的に生きるためには、自らの資質を養うことは必須であり、そのために歴史学習は欠かせないのは当然である。1990年に科目名「西洋史各説」でアメリカ史を都内の私立大学文学部歴史学科で講義して以来、今年度で30年目を迎える筆者がこれまで歴史を講義しながら受講生に届けてきたメッセージを、本稿では大きく二つに分けて論じていく。

その視点は結果的に、子どもと女性の立場から見たものとなった。「弱者」である子どもや女性の現状を1990年代以降から見ていく。さらに21世紀以降「ノーベル平和賞」の対象となってきた事実を整理することで、世界の現状を読み解いていく。こうした現状を理解する上で、いかに外国史（「歴史総合」）学習が必要かを実証することが本稿の目的である。

２．弱者から知る現代世界

２．１　飢餓と子ども―ユニセフ親善大使の役目

2019年３月都内JRの車内広告に、こんな中学入試問題が掲載されていた。「飢餓と貧困をなくすことを使命とする国連の世界食糧計画WFPによれば、世界では９人に１人が飢えに苦しんでいる。５歳未満で亡くなる子どもの半数は栄養不良が関係する。もしあなたが国連の食糧問題担当者だとしたら、日本の中学生に対してどのような行動をしますか」（下線は筆者）と。埼玉県某私立中学の入試問題の抜粋だそうである[7]。

小学６年生に向けられたこの問いかけは、単に中学入試にとどまらず、全日本人が考えるべきことであり、筆者が向き合う大学生にこそ問いかけなければならない問題である。WFP（World Food Programme）のHPには「世界では９人に一人が今この瞬間も飢えに苦しんでいます。国連WFPは、飢餓のない世界を目指して、毎年約8000万人に支援を行っています」と、書き出され、事実を知った人たちからの寄付を募っている。

世界食糧計画は、飢餓と闘う世界最大の人道機関で、1963年設立以来、世界のもっとも貧しい20億人以上の人々に食糧を提供し、世界の80カ国以上の国々において食糧援助を利用して緊急事態に対応し、経済社会開発を支援してきたと公式HPで説明されている。飢餓とたたかい、紛争や自然災害などの緊急時に食料支援を届けるとともに、途上国の地域社会と協力して栄養状態の改善と強い社会づくりに取り組んでいる。国際社会が2030年までに飢餓を終わらせ、食料安全保障を実現し、栄養状態を改善すると約束しながら、世界の９人に１人がいまだに十分な食料を得られない状況で生活している[8]。

同じ国連のユニセフ（UNICEF: The United Nations International Children's Emergency Fund）つまり国際連合国際児童緊急基金での飢餓対策を見るとき、ユニセフ親善大使黒柳徹子の活動を追うことは有効だろう。「ユニセフを通して子どもたちを救うことは、彼女が親善大使としての任命を受けて以来、黒柳の最も重要な目標になりました。親善大使就任後は毎年のように、アジアやアフリカ、バルカン諸国などのユニセフの現場を訪問してきました。これらすべての視察の模様は日本で、そして視察した国々の中で広く報道されてきました。2000年10月、ユニセフは、『ユニセフ子どものためのリーダシップ賞』の最初の受賞者として黒柳を選び、その功績を称えました」と説明されている[9]。

親善大使となって30年目を迎えた2014年に特集された報告では、30年間の訪問国がその目的ごとに分けて紹介されているが、その前年2013年の南スーダン報告に先だってまとめられた映像は衝撃的だった。筆者の講義（歴史入門、アメリカの生活と文化、女性と現代特論）では必ずこの７分程度の映像を見せている。「百聞は一見にしかず」の通り、受講生は世界の子どもたちの現状に唖然としてしまうのだった。学生たちがもっとも衝撃を受けるのは、５歳なのに栄養失調で歩くこともできないタンザニアの男の子、ベトナム戦争時の北爆で撒かれた枯れ葉剤の影響で目がない状態で生まれてきた女の子、自分は破傷風で瀕死状態なのに黒柳大使の幸せを神に祈るインドの男の子などが登場する場面である。

歴史入門の教科書にしている2003年出版の拙著『スクリーンに投影されるアメリカ』では、2003年のソマリア報告を詳細に引用した[10]。「地球上の不平等をなくしたい」と言う黒柳徹子ユニセフ親善大使によるこれまでの訪問国を訪問順にあげておく。

1984年タンザニア→85年ニジェール→86年インド→87年モザンビーク→88年ベトナム+カンボジア→89年アンゴラ→90年バングラデシュ→91年イラク→92年エチオピア→93年スーダン→94年ルワンダ+ザイール→95年ハイチ→96年旧ユーゴスラビア→97年モーリタニア→98年ウガンダ→1999年コソボ→2000年リベリア→2001年アフガニスタン→2002年アフガニスタン→2003年ソマリア→2004年コンゴ民主共和国→2005年インドネシア→2006年コートジボワール→2007年アンゴラ→2008年カンボジア→2009年ネパール→2010年→2011年日本（女川町・山元町・亘理町）＋ハイチ→2012年→2013年南スーダン→2014年フィリピン→2015年→2016年ネパール

上記33年間のうち、1997年から2014年の訪問記が『トットちゃんとトットちゃんたち(1997-2014)』となった。すでに最初の13年間の訪問記『トットちゃんとトットちゃんたち』は、1997年に出版され、2001年には講談社青い鳥文庫化もされた。著書名の「トットちゃん」は黒柳の幼少期の呼び名で、偶然にもアフリカで多く使われているスワヒリ語で「トット」は「子ども」の意味だと1984年最初の訪問国タンザニアで知った黒柳は、以下のように書いている。

「神様！ありがとうございます。きっと私は、小さい頃から、子どものために働くために生まれてきたんですね」と。最初の訪問記を読んだ読者から「私は子どものために何をしたらいいでしょう」との質問への答えは「知ってください。関心を持ってください」だそうである。まさにこのことが、現在の世界で日本で必要とされていることだろう。関心を持ち、知ろうとすること、その刺激を与えるための講義を30年間続けてきた筆者が、講義で学生に積極的に見せているのは、2013年に29カ国目の訪問先となった南スーダン報告である。

前述の通り、南北に分かれる前1993年にスーダンを訪問後、日本からの寄付金で、首都ジュバには子どものための避難所「トットちゃんセンター」が1996年に建設されていた。単なる避難所ではなく、「戦争や暴行、レイプなど耐えがたい出来事で負った心の傷を治す」トラウマ・ケア施設である。2013年に訪問した時点で、17年間で2500人の子どもが支援を受けたという。訪問時に、トットちゃんセンターで命を助けられた青年（当時28歳）と面会していた。11歳の時ウガンダで「神の抵抗軍」に誘拐され、３度目の逃亡で「困ったときはトットちゃんセンター」というポスターを見て、駆け込んできたと話していた。日本からの募金で救われた青年の語りを、講義で見た学生たちは、毎回食い入るように聞く。まさに「関心を持つ」出発点に立ったのである。

この訪問記第15章南スーダンの章の最後で、黒柳親善大使は以下のように書いている。「南スーダンの５歳児の３分の１が発育阻害で、４分の１は低体重です。５歳の誕生日を迎

えることのできない子どもは９人に一人もいます。（中略）20年以上続いた内戦は、妊産婦と乳幼児にとって世界で最も危険な国にしてしまった。いったん戦争になったら何もかも破壊されてしまう。子どもたちは親と引き離され、親を失うことだって」と[11]。

そもそも何が契機となり、黒柳親善大使が誕生したかを最後にまとめて、２．３につなげたい。2009年５月20日、黒柳ユニセフ親善大使就任25周年記念感謝式典が、国連大学で行われた。日本ユニセフ協会HPの報告を抜粋しておく。

式典では、サード・フーリーユニセフ事務局次長、御法川信英外務大臣政務官、谷垣禎一ユニセフ議員連盟会長、緒方貞子国際協力機構理事長、赤松良子日本ユニセフ協会会長が祝辞を述べた。黒柳ユニセフ親善大使就任は、自身の子どもの頃の思い出を綴った『窓ぎわのトットちゃん』を当時のユニセフ事務局長ジェームス・グラント（故人）が、緒方の紹介により読まれたことがきっかけだった。1984年就任以来、黒柳大使は今日［2009年］まで28回の世界各地の現地視察に取り組んだ。直接のきっかけを作った緒方貞子国際協力機構理事長は、本稿２．３でその活動の詳細を紹介することになる国連難民高等弁務官を1990年代に務めたのだった。彼女からの祝辞では、黒柳が25年に亘り世界での苦しみを見える形で、日本や世界へ知らせてきた功績を讃えた。

式典では黒柳大使の活動を振り返る映像も上映され、黒柳大使は初めて栄養失調の子どもに出会った時のこと、難民キャンプで強く生きる子どもたちの話も紹介した。「子どもたちはおとなを信じてバナナの皮の下で死んでいくんだよ、というタンザニアの村長さんのお話が忘れられません」と心に残るエピソードも語った。このような機会を与えられたことへの感謝と、これからもユニセフ親善大使としての活動に努力していきたい旨の決意を述べたという[12]。

この式典で使われた映像は、「30周年記念映像」としてテレビ放映され、筆者は手元に教材として保管して、講義を通して学生に見せている。前述したとおりである。この映像で黒柳親善大使が語るように、「知ること」「関心を持つこと」こそが、次世代の若者に期待されている。我々は外国史学習を通じて続けていかなければならない。

２．２　イスラム教徒の女性たち―マララの場合

本稿執筆中の2019年３月22日に、史上初の未成年でのノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイ（Malala Yousafzai:1997. ７.12-）が、東京で行われる第５回国際女性会議WAW！（World Assembly for Women）で基調講演を行うために初来日したニュースが入った。３月は女性月間（３月８日が「国際女性の日（International Women's Day)」であるに由来）でこうした会議が開催される意味は深い。先頃、世界191カ国における女性議員割合及び国際比較統計が発表された。直近３月19日付けで日本は144位と先進国では最下位、北朝鮮からも10位下となっている[13]。来日初日に、安倍首相と会見したこともニュースは伝えたが、日本の政治への女性参加の貧弱な状況を考えると、ただのポーズでしかなく、首相に女性の政治参加や権利獲得に対して積極的に努力する気配は皆無と言える。

マララ・ユスフザイは1997年７月12日に、パキスタン北部でイスラム教スンニ派の家庭に生まれた。父親のジアウディン・ユスフザイは地元で女子学校の経営をしており、娘のマララは彼の影響を受けて学校に通い、数学が苦手ながら医者を目指していたという。2007年に武装勢力パキスタン・タリバン運動（TTP）は一家が住むスワート渓谷の行政を掌握し、恐怖政治を開始した。特に女性に対して教育を受ける権利を奪っただけでなく、教育を受けようとしたり、推進しようとする者の命を優先的に狙うような状況だった。

2009年、11歳の時にTTPの支配下にあったスワート渓谷で恐怖におびえながら生きる人々の惨状を、BBC放送の依頼でBBCのウルドゥー語のブログにペンネームで投稿してタリバンによる女子校の破壊活動を批判し、女性への教育の必要性や平和を訴える活動を続け、英国メディアから注目された。TTPがパキスタン軍の大規模な軍事作戦によってスワート渓谷から追放された後、パキスタン政府は彼女の本名を公表し、「勇気ある少女」として表彰した。その後、パキスタン政府主催の講演会にも出席し、女性の権利などについて語っていたが、これに激怒したTTPから命を狙われる存在となったのだった。

2012年10月９日、通っていた中学校から帰宅するためスクールバスに乗っていたところを複数の男がバスに乗り込んできて銃撃、頭部と首に計２発の銃弾を受けたのだった。彼女は首都イスラマバード近郊にある軍の病院で治療を受け、10月15日、さらなる治療と身の安全確保のため、イギリス・バーミンガムの病院へ移送されたのだった。イギリスでの治療の甲斐あって、15歳の彼女は2013年年明けに、シモーヌ・ド・ボーヴォワール賞を受賞した。さらに同年７月12日、国際連合本部で演説し、銃弾では自身の行動は止められないとして教育の重要性を訴えた。このとき国連は、マララの16歳の誕生日である７月12日を「国連マララ・デー」と名付けたのだった。同年10月10日にはフランス・ストラスブールでサハロフ賞（人権と思想の自由を守るために献身的な活動をしてきた個人や団体をたたえる賞）を受賞した。

この年にすでにノーベル平和賞候補の声が上がっていたが、１年後の翌2014年に受賞した。本節冒頭で表現したとおり、17歳で史上最年少記録とともにノーベル平和賞受賞者となった。2017年４月10日には、ニューヨークの国連本部で国連平和大使に任命され、19歳での国連平和大使任命となり、再び史上最年少任命となったのである。

こうしてマララ本人のみが讃えられるだけではなく、2013年12月、ユネスコとパキスタンは、就学機会を奪われた女子教育を支援する「マララ基金」設立を発表した。 2015年７月にはシリア難民の少女を対象として、レバノン東部のベカー平原に学校を開設した。この学校の開校にあたっては「マララ基金」から資金拠出された[14]。

日本でも、すでに2012年からマララの活動に支援を表明してきた「子どもとともに地域開発を進める国際NGO」がある。「プラン・インターナショナル」（以下「プラン」と略記）という団体で、同じく女子の権利と教育を応援する団体として活動している。ウェブ上でマララ来日を伝え、彼女と同様の活動団体のHPの情報を参照しながら、世界の子どもたちの現状、女子教育の現状についてまとめておきたい。

世界では、いまだに２億人の子どもたちが教育を受けられず、そのうち65％を占める１億3000万人が女子で、世界の非識字成人人口の３分の２は女性である。途上国では、女子は家事労働の担い手、男子は収入を得る働き手、という刷り込みが強くあり、10代で望まない結婚をさせられる女子が多くいる。プランは地域や学校を拠点に、女子教育の必要性を説き、意識啓発や、男女別トイレの建設、女性教師の育成、ジェンダーに基づいた暴力をなくすための活動などを行っているという[15]。

上記活動内容の一つ「男女別トイレ建設」関連で、筆者が後期科目で学生にする質問に触れておく。「11月19日は何の日？」である。「歴史入門」「アメリカの生活と文化」など講義科目ばかりか英語科目でも、常に日付や季節に敏感になるよう話しているが、11月19日は「世界トイレの日」である。『日本大百科全書（ニッポニカ）』の説明を抜粋しておく。「トイレにまつわるタブーを打破し、下水処理や屋外排泄の根絶など、多岐にわたる公衆衛生上の課題を提起して、その政策化を促進するために定められた日。世界的な公衆衛生運動に取り組むNGO（非政府組織）世界トイレ機関（WTO：World Toilet Organization）が、2001年11月19日に設立されたことにちなむ。（中略）2013年７月の国連総会で、毎年11月19日を国連「世界トイレの日」とすることが、正式に定められた。国連児童基金（ユニセフ）と世界保健機関（WHO）が発表した報告書『衛生施設と飲料水の前進2013』によれば、2011年末の時点で、世界人口の３割を超える約25億人が衛生的なトイレを使用できない状態にあり、このうち、10億人あまりは屋外で排泄している。こうした状況が川や土地を介して病気を引き起こす原因ともなり、1日1600人もの５歳未満の子供［ママ］が下痢によって命を奪われていると、国連児童基金は推計している」[16]。

この活動を積極的に進めているプランは、マララ来日に合わせてマララ関連の書籍『わたしは女の子だから 世界を変える夢をあきらめない子どもたち』を出版した。プランによるグローバルキャンペーン「Because I am a Girl（わたしは女の子だから）」の立ち上げに関わった成果の書籍化だが、性差別をなくして女の子の権利を守り、貧困から救うためのこのキャンペーンは、2007年から実施されてきた。書籍紹介HPでもマララのことを「『１本のペン、１冊の本が世界を変える』との信念のもと、すべての子どもたちが教育を受けられるようにと精力的な活動をつづけるマララさんは、自分の未来を切り拓こうとする女の子たちのシンボル的な存在となっています」と紹介する。

３月23・24日に東京で開催された「第５回国際女性会議WAW！」で基調講演し「女性が将来活躍するために、指導者は女子教育に投資しなければならない」と訴えた。マララは「私は学校に通うことができていない１億3000万人の少女を代表してここにいる」と強調し、女子教育を支援する「マララ基金」の創設者として、「世界中の全ての少女が中等教育まで終えられれば、30兆ドルの経済効果がある」と説明した。また６月に大阪で開かれる20カ国・地域（G20）首脳会議に向けて「G20に新たな資金提供をお願いしたい。女性に投資することで、私たちの想像を超える大きなことができる」と述べ、各国指導者に女子教育への経済支援を呼びかけたのだった[17]。

マララに関する書籍や絵本は、参考文献一覧にまとめたように多いが、今後も続々出版されることだろう。ドキュメンタリー映画『わたしはマララ』は、本稿３．４「環境破壊を止める」で言及するアカデミー賞受賞ドキュメンタリー『不都合な真実』を監督したデイヴィス・グッゲンハイム監督の作品である。「“ふつう”の女の子が、世界を変えようとしている」の宣伝文句ですでにDVD化され視聴可能である。筆者が講義でマララをテーマに話をするときに使う映像は、ノーベル平和賞受賞前の2014年年明け１月８日に放送されたNHKクローズアップ現代「16歳 不屈の少女マララ・ユスフザイ」である。

「１人の子ども、１人の先生、１冊の本、１本のペンが世界を変えることができます」と語る2013年マララの誕生日の国連でのスピーチを映し出しながら、彼女がここに立つまでの経緯映像が冒頭７分程度放送されたが、この部分を筆者の講義では学生に見せている。国谷キャスターによるインタビューも大変刺激的だが、26分間の番組全部を見せる余裕はない。ネット検索によれば、この番組の動画配信サービスがあるようで、興味を持った学生にはネットで見るように伝えることにする。

講義は知識を与えることによって学生の興味を刺激し、自ら学ぶ姿勢を持たせるきっかけでなければならない。「アクティブ・ラーニング」など、文部科学省から強調されるまでもなく、講義では学生こそが中心になって学びの場を広げていくはずである。マララをきっかけに、世界の女性の状況、子どもの現状を自ら学び取ろう、行動に移そう、と言う気持ちになる学生を育てるのは、大学教育（外国史教育）の使命であろう。

２．３　武力紛争と女性―1990年代の成果と21世紀への語り継ぎ

20世紀最後の10年間は、第２次世界大戦以降周知されないまま繰り返されていた世界各地の武力紛争が明らかになり、その元で厳しい状況に置かれた女性の現実が白日の下にさらされた時期であった。本節では、1990年代の成果をふまえて、21世紀を迎えて19年目を迎える現在まで、どのように語り継がれているかを検討する。

映画『ホテル・ルワンダ』でも描かれた中部アフリカ東部の内陸国ルワンダでの民族虐殺（genocide）は、世界発信の代表的な事実だった。ルワンダでの主導権争い、少数派ツチ族が多数派フツ族を支配するという構図、さらに19世紀以来のドイツ、ベルギーによる植民地政策により悪化、世界にその悲惨な現状が知らされたのは1990年代に入ってからだった。1994年にルワンダで発生した民族虐殺について、アトランタ創設のCNNによって映像でその惨劇が知らされたことで世界は驚愕した。1994年４月からわずか100日間に、80万～100万人が犠牲になったと言われるルワンダ虐殺だった。後述する「性暴力の被害」については、ルワンダ虐殺の際にも起こり、性暴力の被害を受けた女性から生まれた子どもは数千人におよぶと言われる。あれから丁度四半世紀、2019年４月にルワンダ国内各地で追悼式が行われたという[18]。

「武力紛争と女性」というキーワードで考えるとき、この1990年代の成果は大きく、先達たちの長い闘争が報われ始めた時期ともなったのだった。武力紛争から女性や子どもを救

い出す役目を果たしたのが、国連難民高等弁務官事務所（The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees: UNHCR）だと言えるだろう。

UNHCRは1950年12月14日に設立された国際連合の難民問題に関する機関である。難民に関する諸問題の解決を任務とし、高等弁務官の活動の補佐を目的とする組織で、スイスのジュネーブに本部を置いている。高等弁務官は国連総会で選出され任期は５年で、2019年現在国連総長であるポルトガル出身のアントニオ・グテーレス（Antonio Guterres: 1949-）は、2005年から２期、2015年まで第10代高等弁務官を務めた。グテーレスから２代前の第８代高等弁務官は、日本人女性の緒方貞子だった。1990年代前半、湾岸戦争やカンボジアの国連平和維持活動（PKO）を通して、緒方貞子国連難民高等弁務官、明石康国連事務総長特別代表の名前は世界に響いていた。1990年から２期、20世紀最後の10年間、前述した通り大きな成果を上げた時期だった1990年代は、日本人女性によって仕切られていたことになる。

これまで11人が務めた高等弁務官で女性はわずか一人、緒方貞子のみだった。彼女が取り仕切った1990年代は、世界各地で紛争や戦争が起こり、世界中に難民の存在が明らかになった10年間でもあった。本節の論点は「1990年代の成果」だが、UNHCRが最も積極的に活動し、その成果を世界に発信した10年間でもあった。緒方のこうした活躍を21世紀に入って受け継ぐ女性たちが登場した。日本人女性の中満泉とアメリカ人女性アンジェリーナ・ジョリー（Angelina Jolie: 1975-）である。この二人の活躍を紹介して、緒方貞子から21世紀へ語り継がれたものを確認したい。まず、中満泉の仕事をまとめる。2017年５月、国連本部の事務総長、副事務総長に次ぐ事務次長ポストで、軍縮部門のトップに日本人として初めて中満泉が就任した。スウェーデン人外交官である夫と中学・高校生の２人の娘を家族に持つ女性である。

中満泉の仕事上の恩師が緒方貞子だった。クルド難民危機が始まる３ヶ月前の1990年12月末に国連総会で、第８代国連難民高等弁務官に選出された緒方が、２月半ばにジュネーブ本部に着任したとき、初めての現場視察でイランからトルコへ入る緒方に随行したのが中満だった。彼女の著書では「緒方難民高等弁務官の下、UNHCRはまたたくまに活力を取りもどし、人道危機に対応する最も効果的な国際機関に生まれ変わっていく」と述べている。さらに「UNHCRは難民たちの利益を守るという組織としての『モラル・コンパス』と緒方さんの指導力を頼りに支援活動に踏み出した」と、クルド難民支援を回想している[19]。

2017年８月６日、中満は広島の平和式典に出席した。国連叩き上げのキャリアを持つ彼女は、2017年５月に事務次長に就任し、同年７月には「核兵器禁止条約」の採択（３章３節参照）をまとめる大役をこなし、世界的にも大きなニュースになった。

緒方の思いを受け継いだもう一人を紹介する。2000年は設立50周年にあたったため、記念事業として難民教育機関が設立された。アメリカ女優で活動家のアンジェリーナ・ジョリーが2001年に親善大使、2012年に特使に任命され、この機関が注目された。UNHCR日本のHPで紹介されたジョリーの活動を紹介しておく。

アンジェリーナ・ジョリーは2001年にUNHCRの親善大使に任命された後、シエラレオネ、

カンボジア、パキスタンを視察のために訪れ、翌年さらにナミビア、タイ、エクアドル、ケニア、コソボの５つの国と地域も訪問した。親善大使として人道支援活動の現場をただ通り過ぎるのではなく、ありのままの現実を自分の目で見て、現地の人々の声に耳を傾けた。訪問を通して感動し、驚き、また悲しく感じたこと全てを日記に残しそれを出版して（*Notes from My Travels: Visits with Refugees in Africa, Cambodia, Pakistan and Ecuador*）その売り上げを全てUNHCRに寄付したのだった。

その後も人道支援の現場へ40回以上赴き、難民・避難民となった何百万人もの人々の苦しみを伝え、保護を訴えてきた。彼女の訪れた場所の中には、シリア、イラク、パキスタン、ヨルダン、アフガニスタンなど命の危険を伴うような場所も含まれていた。支援現場では女優としての自分を忘れ、出来る限り難民の声に耳を傾け、その現状とニーズを把握した。現場視察に加え、国際的な外交の場でも、世界中の難民問題への意識向上を呼びかけてきた。

同時に寄付という形でも貢献し、2001年以降総額500万米ドルをUNHCRに寄付し、難民への一時的支援だけでなく、長期的且つ根本的解決策にも関心を寄せてきた。2003年には養子マドックスの名を取った基金プロジェクト「マドックス・ジョリー・ピット基金プロジェクト（Maddox Jolie-Pitt Foundation Project）」を立ち上げ、2005年には「難民と移民の子どもたちのためのセンター（National Centre for Refugee and Immigrant Children）」と「弁護を必要とする子どもたちのための組織（Kids in Need of Defence）」を立ち上げ、開発、教育、医療、法律など様々な分野で支援を提供してきている[20]。

日本では中満泉、アメリカではアンジェリーナ・ジョリー、まさに「氷山の一角」のこの二人を追いかけるように無数の世界中の女性たちが、緒方貞子の「想い」を受け継いでいる。筆者は講義を通して、この「想い」を受講生に届け、彼ら彼女らの「気づき」を引き出す役目を続けていく。

３．ノーベル平和賞から読み解く21世紀

３．１　平和を追求した女性受賞者たち

アルフレッド・ノーベル（Alfred Bernhard Nobel: 1833-1896）の遺言によって創設されたノーベル賞は、５部門のうちの一つ平和賞だけは、スウェーデンではなくノルウェーで授与が行われる。隣国であるスウェーデンとノルウェー両国間の和解と平和を祈念しての決定で、ノーベル平和賞は特別な意味合いの賞となってきた。1900年最初の受賞者は、国際赤十字の創設とジュネーブ条約制定への貢献が認められたアンリ・デュナン（Jean Henry Dunant: 1828-1910）だった。

前節で言及した国連難民高等弁務官事務所は創設５年目、1954年に「東西冷戦下の難民のための政治的、法的保護に対して」の理由で受賞、さらに1981年に「難民の移住と定着と処遇の改善に資する活動に対して」の理由で二度目の受賞となった。2018年まで118年間で、UNHCRのような組織受賞は22件（UNHCR ２回含む）であった。個人での受賞は圧倒的多数で男性が受賞し、女性は2018年度の受賞者が16人目だった[21]。

本節では、女性の視点からノーベル平和賞直近18年間の21世紀を読み解くことを目的とする。最初の女性受賞者は1905年に『武器を捨てよ！』の著者ベルタ・フォン・ズットナー（Bertha von Suttner: 1843-1914）だったが、そのあと四半世紀かかり1930年に、シカゴのセツルメントハウス「ハルハウス」創設者であるアメリカ女性ジェーン・アダムス（Jane Adams: 1860-1935）が「婦人国際平和自由連盟の指導とその社会改革に対して」の理由で二人目の受賞者となった。16人のうち、マザー・テレサ（1979年）、軟禁中で授賞式には夫が代わりに出たアウンサンスーチー、本稿第２章で対象とした最年少受賞者マララなどの著名人を含んでいる。ズットナー受賞以来2004年までの女性受賞者12人に着目した原著が2004年にドイツ語版で出版され、同年に開催された欧州安全保障協力機構ワルシャワ会議のために英訳され、*Peace Woman*となり刊行された。その日本語訳が『ピース・ウーマン：ノーベル平和賞を受賞した12人の女性たち』（英治出版、2009年）として出版された。11章で展開された12人の受賞者紹介の小見出しのみを列挙しておく[22]。

１．ベルタ・フォン・ズットナー（1905）平和を求める「高貴な人」へ
２．ジェーン・アダムス（1931）魂の暗闇に慈悲をもたらすために
３．エミリー・グリーン・ボルチ（1946）平和の精神構造
４．ベティ・ウィリアムズ＋マイレッド・コリガン（1976）平和活動の母たち
５．マザー・テレサ（1979）「神のご加護がありますように」
６．アルバ・ミュルダール（1982）「諦めるのは人間にはふさわしくない行為です」
７．アウンサンスーチー（1991）沈黙の刑を科せられ、それでもなお声を上げる
８．リゴベルタ・メンチュウ（1992）地球の歌
９．ジョディ・ウィリアムズ（1997）戦争が終わっても、殺人は続く
10．シーリーン・エバーティ（2003）恐怖を乗り越えて
11．ワンガリ・マータイ（2004）アフリカの名の下に

これら12人に続いて、その後の15年間で５人の女性が受賞した。合計17人となった。以下に合わせて、列挙しておく。

13．エレン・ジョンソン・サーリーフ、レイマ・ロバータ・ボウィ、タワックル・カルマン（2011）平和構築活動に、女性が安全かつ全面的に参加できるよう求めて、非暴力の活動を行った
16．マララ・ユスフザイ（2014）
17．ナディア・ムラド・バセ・タハ（2018）

1905年から2018年までの113年間で、合計17人の女性たちがその努力を認められたのだった。ただし、ここに登場した女性たちは「氷山の一角」であり、日々世界の平和のために活動を続けている多くの女性たちの存在を知ることが、現在の我々に求められている。

３．２　「武器としての性暴力」の意味

2018年12月５日ノーベル平和賞は、内戦状態が続くコンゴ民主共和国（旧ザイール）で

レイプ被害にあった女性たちの治療に努める婦人科医デニ・ムクウェゲ（当時63歳）と、過激派組織「イスラム国」（IS）による性暴力被害者で、現在は国連親善大使として人身売買被害者の救済を訴えるイラクの少数派ヤジディ教徒ナディア・ムラド・バセ・タハ（当時25歳）に授与されることが発表された。

ムクウェゲは1955年生まれのコンゴ人産婦人科医師で、コンゴ東部ブカブにパンジー病院を設立、４万人以上の性暴力被害者を治療しながら、国連本部をはじめ世界各地で紛争と性暴力、グローバル経済の関係について訴えてきた。その活動が評価され、国連人権賞、ヒラリー・クリントン賞、サハロフ賞などを受賞したのち、2018年にはノーベル平和賞を受賞したのだった。

世界中で性被害に声を上げ、被害者への連帯を示す＃ME TOO運動[23]が広がるなか、紛争下では女性への性暴力が「武器」として使われている実態に目を向け、撲滅へ向けた具体的な取り組みを国際社会に求めることを狙いとした授与だった。受賞理由にある「武器としての性暴力」という表現は、それだけで強烈な印象を残す。ノーベル平和賞受賞により、世界の耳目を集めた「武器としての性暴力」に関して、すでに５年以上前から日本でも情報は発信されていた。その例を二つ確認しておく。

まず2013年11月の記事である。元UNHCR職員米川正子による報告「『性的テロリズム』レイプ・サバイバーの治療専門家の闘い①」（2013.11.13）から一部引用しつつ紹介する[24]。

1990年代後半から現在［2013年］まで戦争が続くコンゴ東部では、女性３人の内２人が性的暴力の犠牲者になり、これは毎週女性160人が、主に武装した男性によってレイプされている。コンゴ東部勤務時に、国内避難民キャンプにいた女性が「武装勢力にレイプされ、性器が痛い。どうすればいいか」と相談されたことがあった。性的暴力が蔓延しているために、国連はコンゴ東部を「女性や少女にとって、世界で最悪の場所」「世界におけるレイプの中心地」と呼ぶほどだった。

ムクウェゲは、1999年にスウェーデンの教会などから支援を受けて、コンゴ東部の主要都市・ブカブにパンジー（Panzi）病院を建て、それ以来、約３万人以上のレイプ・サバイバーの治療に関わってきた。武装紛争下の女性に対する暴力が、「戦争の武器」として意図的な戦略に使用されている事実は一般的に認識されているが、その研究は大変まばらで、国際的に注目を浴びたのは、1990年代に入ってからだった。

半世紀以上前に日本軍の性奴隷にさせられた女性たちの証言、謝罪と賠償を求めて日本政府へ訴えた事実から始まり、国連が設置した旧ユーゴ法廷とルワンダ法廷で、武力紛争下の性的暴力の罪が問われるようになった。国際刑事裁判所（ICC）のローマ規程に、人道に対する罪や戦争犯罪として「性奴隷制」が規定された。2000年には国連安保理で、武力紛争下での性的暴力から女性を保護する重要性、加害者を起訴し不処罰を終える国家の責任を要請する決議1325号が採択された。

2013年３月にイギリスのウイリアム・ヘイグ外務大臣とアンジェリーナ・ジョリー親善大使がコンゴ東部を訪問し、紛争地における集団レイプに対する国際アクションを実施した。

続いて６月のＧ８外相会合で、二人は武力紛争下での女性に対する性的暴力の根絶を訴える宣言を主導したのだった。ムクウェゲの言葉通り、性的暴力をなくすためには、医療ではなく政治的解決法が不可欠で、そのためにムクウェゲは活動家として様々な場で演説を続けた。2012年10月には自宅にいたムクウェゲは暗殺未遂にあい、一家は一時的にスウェーデンとベルギーに亡命した後も、「コンゴ政府には平和も法の正義（justice）もない」と非難を続けた。政府寄りの地元大手メデイアは彼の実績を報道せず、警察は暗殺未遂事件の調査も行なわなかった。

その一方で、地元の女性たちが「国連平和維持活動軍（PKO：世界最大級が駐在）でなく、我々女性がドクターを守るから帰ってきて。我々を助けて」と強く懇願したのだった。彼女たちは１日１ドルという貧しい生活を営んでいるにもかかわらず、彼の飛行機代をかき集めるために農作物を売り費用を作った。そのお金でムクウェゲ一家はコンゴに戻り、パンジー病院内の敷地で生活している。「性的暴力より“性的テロリズム”と呼ぶ方がふさわしいのではないか。とにかく描写する言葉がない」と大勢の性的暴力の証言者であるムクウェゲは話す。

2018年ノーベル平和賞受賞以前からの日本人による情報発信のもう一例は、2016年10月に開催されたシンポジウムだった。東京大学「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム」主催、東京大学総合文化研究科人間の安全保障プログラム／教養教育高度化機構国際連携部門、コンゴの性暴力と紛争を考える会共催で、デニ・ムクウェゲを招聘した講演会が開催された。そこでもムクウェゲは同様に「これは『性暴力』ではなく、『性的テロリズム』です」と語った。

コンゴ東部では、コンピュータや携帯電話などに使われる鉱物資源タンタルが産出され、武装勢力がその資金源である鉱山の住民を支配する手段として「武器としての性暴力」が行われているという。ムクウェゲ医師は「レイプは性的な欲求のためではない。これは性的なテロである」と話す。被害者は生後６ヶ月の乳児から80歳の女性まで、一度に100人単位で襲われることもある。住民の目の前で暴行され、性器を破壊され、住民に恐怖を与えて支配するために、組織的に、計画的に行われている。被害にあった住民の多くは村を去り、残った者も奴隷のように扱われていることが知らされたのだった[25]。

「武器としての性暴力」は単にコンゴに限定されない。もう一人のノーベル平和賞受賞者が証明する。人身売買被害者の救済を訴えるイラクの少数派ヤジディ教徒ナディア・ムラド・バセ・タハは、2016年９月16日国連親善大使就任のために国連を訪問した。彼女のそばで「ナディアさんの母親は処刑され、埋められました。犠牲となった年配の女性たち80人の一人でした。墓標もありません。兄弟らも殺されました。たった一日で600人が殺されたんです。これはジェノサイド（大虐殺）です」と証言したのは、アマル・クルーニー弁護士[26]だった。アマル弁護士は、ナディア・ムラド・バセ・タハ代理人を務めるため、彼女の代わりにこう発言したのだった。

イラク北部にあるナディアの故郷の農村は2014年８月、過激派組織「イスラム国」（IS）

に襲撃された。母親と兄弟６人は殺された。ナディアは他の女性たちと共に誘拐され、性奴隷にされた。「2014年８月全てが変わりました。イスラム国が誘拐、殺害、レイプするために来ました。これはジェノサイドです」さらに「私のような女性たちが解放されない限り、私は自由を感じることができません。3200人のヤジディ教徒がとらわれたままです。救わねばなりません」とナディア自身が国連で訴えたのだった。

代理人のアマル弁護士からはさらにつぎのように発言した。「この議場で話すのは初めてです。ここにいることを誇りに感じられたらと思いますが、そうではありません。国連の支持者として、恥ずかしく思います。どんな国もジェノサイドを防ぐことも、罰することもできないでいるからです。自国の利益を優先しているからです。弁護士として、恥ずかしく思います。正義がなされず、告発もほとんどされていないことを。女性として、恥ずかしく思います。ナディアさんのような女性が身体を売られ、戦場で利用されることを。人間として、恥ずかしく思います。助けを求める叫びを無視することを」と[27]。

Asahi Weekly 最新号（2019／４／14）の表紙は「人権派弁護士アマル・クルーニー」だった。ミャンマーの少数派イスラム教徒ロヒンギャへの迫害問題を取材したロイター通信記者が有罪判決を受けた事件の弁護担当など、人権問題で国際的に活動していることが知らされ、紛争地での性暴力撲滅を訴え、昨年のノーベル平和賞を受賞した人権活動家ナディア・ムラド支援でも知られると説明されている。

英国のハント外相はこのほど、主要７カ国（Ｇ７）外相会議が開かれている仏北西部ディナールで、アマル弁護士を報道の自由担当特使に任命したと発表した。取材活動を妨げる法律が残る国々での、法改正を支援する活動を担当するという。アマル弁護士は「ニュースを報じることがこんなに危険になったことはない。記者が狙われると、民主主義は揺らぎ、権力者は説明責任を問われず、人権侵害が横行するようになる。ペンを持つ者は自由であるべきだ」と語ったという[28]。

ナディアの著書 *The Last Girl: My Story of Captivity, and My Fight Against the Islamic State* はTim Duggan Booksから2017年11月に出版され、出版１年後、ノーベル平和賞受賞決定前にすでに『THE LAST GIRL―イスラム国に囚われ、闘い続ける女性の物語』として翻訳出版されている[29]。若い世代がまずしなければならないことは、こうした情報発信に敏感になり、当事者の声に耳を澄ませること、「自分に何ができるか」を考えるきっかけとすることである。

３．３　核兵器廃絶への遠い道のり

「私たちは微力ではあるが無力ではない」とは、ジャーナリスト池上彰が、NHK広島勤務当時、あるヒバクシャ（被爆者）から聞いた言葉だという[30]。これほど、説得力に富み、勇気づけられる言葉があるだろうか。

2017年７月７日ニューヨーク国連本部で前述した中満泉の尽力もあり「核兵器禁止条約」は採択された。法的拘束力を持つ核軍縮関連の条約としては、20年ぶりの交渉成立だった。

成立前の３月にその交渉会議でカナダ在住の日本人被爆者サーロー節子（85歳）が演説したのだった。演説後の報道陣からのインタビューで「日本政府の演説があまりに悲しい。日本は頼りない国」と語ったという。後述するが、この「核兵器禁止条約」採択がきっかけでこの年のノーベル平和賞を、条約成立に尽力した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN: International Campaign to Abolish Nuclear Weapons）が受賞した。その受賞スピーチをしたのもサーロー節子だった。

核兵器はなぜ作られたのか、「マンハッタン計画」の元で人類で最初に作ったのはアメリカ合衆国で、その原子爆弾を兵器として用いられたのが日本であった。1945年８月６日に広島、三日後の９日に長崎、ウランとプルトニウムという異なる爆弾がそれぞれ落とされ「実験」されたのだった。日独伊三国と戦う連合国のうち、莫大な費用を必要とする原子爆弾製造をなし得たのは、自国を戦場としなかったアメリカ合衆国だった。

広島からわずか20日前の７月16日、ニューメキシコ州アラモゴードで人類最初のキノコ雲が上がった。原爆実験成功の瞬間、目撃した『ニューヨーク・タイムズ』の記者は旧約聖書創世記の「光あれ」を思い出したという。そもそもナチスドイツに対抗して制作開始したにもかかわらず、完成前にドイツは敗戦した。日本降伏を協議するポツダムにいたトルーマン大統領に実験成功が知らされた時「これで戦争を終結させられる」と語ったという。広島ばかりか長崎（当初の目的地は福岡）までも被爆地となった。なぜ、アメリカ合衆国は核兵器を二度も使用したのか。

2008年の大統領選挙で合衆国史上最初の黒人大統領となったバラク・オバマは、就任直後の2009年４月に欧州連合との初首脳会談のため、チェコの首都プラハを訪問した。そこで「アメリカは世界で唯一核兵器を使用したことのある核保有国として、行動を起こす責任がある」として「核兵器のない世界の平和と安全をめざす」と宣言した。「プラハ演説」と称されたこの演説が、同年末にはオバマ大統領にノーベル平和賞をもたらした。

ノーベル平和賞受賞後も「核兵器のない世界」になる気配も見えないまま、７年後の2016年５月27日、伊勢志摩サミット終了後にオバマ大統領の広島訪問が実現した。平和記念公園で行われた演説には「謝罪」はなかった。大統領最終年ということで、広島訪問に呼応するように、2016年の暮れも押し迫った12月28日（日本時間：ハワイ時間27日）に、安倍首相がハワイ、オアフ島のパール・ハーバーを訪問した。

ハワイ州出身のオバマ大統領が休暇でハワイ滞在中で、日米両首脳による真珠湾訪問が行われ、世界中の注目を集めた。日本軍の攻撃によって、約900人の遺体を残して沈んだままの戦艦アリゾナ号上に、追悼施設が作られて、真珠湾攻撃による戦死者の全ての名前が刻み込まれ、アリゾナ記念館（Arizona Memorial）と名付けられ、1962年に開館した慰霊施設である。

現在、アリゾナ記念館のそばには、戦艦ミズーリ号が永久停泊していて、ミズーリ記念館となっている。この戦艦は建造されて２度目の航海として、1945年９月２日日本国降伏文書調印式を行うために東京湾へやって来たのだった。

安倍首相による訪問で、日米両首脳が真珠湾攻撃に関して、それぞれにメッセージを世界へ発信した。真珠湾に眠る戦死者の霊を慰めるという行為と、戦争を繰り返さないというメッセージ…。この真珠湾訪問からすでに２年半が過ぎた現在［2019年４月］も、世界中でシリアや南スーダンで内戦などの争いが繰り返されて、多くの子どもたちや女性たちが戦火の下を逃げ回っている。難民を受け入れようとせず「ポピュリズム」一言で片付けようとするトランプ政権をはじめとする世界各地の政治状況を憂う[31]。

この真珠湾攻撃がすべての出発点となり、ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下につながった。核兵器を戦争で使用した最初となったわけだが、核兵器を作り続けている国々に、世界で唯一の被爆国である日本が、積極的に「反戦・反核」を唱えていくべきである。政府レベルではそれがなされていないことは明らかだが、民間レベルでは前述したサーロー節子の活動は特筆に値する。2017年12月、ノーベル平和賞が核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）に授与された。ノーベル平和賞授賞式で、広島での被爆体験を証言してきたカナダ在住のサーロー節子が感激的な受賞スピーチをした。

筆者は1993年度以来、8月6日と9日にもっとも近い前期末講義では「マンハッタン計画」をテーマに「ヒロシマ・ナガサキ」の「ヒバクシャ」たちの言葉を学生に届けてきた。その講義でずっと使ってきたドキュメンタリー映像がある。終戦50年目の1995年に世界各国が核兵器に関するドキュメンタリーを作ったが、その中でカナダ制作の「ヒロシマ」から13分間教材として見せてきた。そこで語っていたのが、このサーロー節子だった。語りの一部がノーベル平和賞受賞スピーチでも言及されていたので、本稿巻末では［付録：2017年ノーベル平和賞受賞（サーロー節子）スピーチ全文］として全文掲載した。

「反戦・反核」は歴史研究者としての筆者の立場だが、特に原子爆弾製造計画に関しては、拙著随所で活字にもしてきた。「核廃絶への遠い道のり」として『スクリーンに投影されるアメリカ』では一章設けた。出版から16年目を迎える2019年３月でも現状が変わらないことを憂いながら、本節題はその章題をそのまま用いた。

ノーベル平和賞受賞スピーチから１年余り経った2019年３月に、サーロー節子がフランシス教皇と面会したというニュースが舞い込んだ。バチカンで20日、NPO「アースキャラバン」が日本から持参した「原爆の残り火」を教皇は受け取り「核の火が永久に燃えることのない平和」に向けて吹き消すことを教皇にお願いしたところ、一息で吹き消したという[32]。

核兵器ではないものの、原子力発電所はそのまま核物質をかかえ、2011年３月11日の福島第一原子力発電所の事故は、世界中に大きな警鐘を鳴らした。フクシマ（すでに英語）周辺の避難住民は筆舌に尽くしがたい苦難の道を歩かざるを得なくなって、すでに８年が過ぎた。原発事故がもたらした環境破壊を、さらに次節で考えていきたい。ヒロシマ、ナガサキは、フクシマへとつながり、世界中の人たちが日本に注目している。日本人が自らの意見を持たずして、世界への発信はあり得ない。サーロー節子のような一部の人にだけ任せるのではなく、一人一人が自分の言葉で発信する国にしていくために、筆者は大学教壇での「核廃絶への遠い道のり」の講義は続けていく。

３．４　環境破壊防止のゆくえ

３．１で引用した『ピース・ウーマン：ノーベル平和賞を受賞した12人の女性たち』第11章で紹介された12人目のマータイ受賞の意義は、環境分野が平和賞受賞対象となった最初だと言うことだった。平和賞の対象は、国際紛争の解決や人権擁護活動への貢献とされてきたが、21世紀を迎えた2001年にはその対象を環境保護分野にまで拡大する考えを示して、2004年のマータイ受賞時点で平和賞委員会は「1901年創設以来、今年初めて平和の定義を広げ、平和賞の対象を環境分野などにも拡大し、歴史的な節目を迎えた」と発表した。

受賞翌年の2005年に来日したマータイは「もったいない」という日本語と出会った。彼女が取り組んできた環境保護活動で合い言葉としてきた３Ｒ（Reduce, Reuse, Recycle）、つまりゴミ削減、再利用、再資源化ということをたった一言で表現した「もったいない」は、マータイによって環境を守る世界共通語「MOTTAINAI」として世界に発信されたのだった。マータイの思いは、ケニアをはじめとするアフリカ大陸全土で4000万本を超える植林につながり、植林への参加者は女性を中心にのべ10万人にもなっているという[33]。

マータイに続いて次々と、環境問題に向き合った人々がノーベル平和賞を受賞していくことになる。2018年12月にポーランドで開催されていた第24回国連気候変動枠組み条約締約国会議、いわゆるCOPと呼ばれその回数をあとにつけるので、今回はCOP24となる。地球温暖化対策の国際枠組み「パリ協定」運用ルールは、先進国と途上国が共通ルールの下で実施する道筋を確実にした。一方で、温室効果ガスの排出量が大幅削減に向かわなければ、地球温暖化の被害を防ぐことはできない。各国が削減目標を高めて対策を強化することを促す明確な合意には至らなかった。

パリ協定採択は2015年のCOP21で翌年発効したが、半年後2017年6月トランプ政権の下で合衆国が離脱表明した。「パリ協定」前には、「京都議定書」が2005年2月に2020年までを対象として各国の削減目標をきめていた。京都議定書以降、2020年以降を対象としたのがパリ協定だった。世界のエネルギー起源の二酸化炭素排出比率は、中国が28%以上を占めていて、合衆国はEUを超えて15.5%と世界２位となっている。

そんな合衆国からいち早く「地球温暖化」に警鐘を鳴らし、ノーベル平和賞を受賞した人物がいた。クリントン政権での副大統領だったアル・ゴア（Albert Arnold “Al” Gore, Jr.: 1948-）である。彼は学生時代から「地球温暖化問題」に関心を持ち、農薬の環境汚染への警告書である『沈黙の春』（*Silent Spring*: 1962）の著者レイチェル・カーソンを尊敬していたこともあり、地球温暖化防止への関心を高める運動に精力的に参加した。2006年には、デイビス・グッゲンハイム監督（『私はマララ』の監督）の地球温暖化に関するドキュメンタリー映画『不都合な真実（An Inconvenient Truth）』で、環境問題を世界各地で訴える様子が記録された。2007年第79回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー映画賞を受賞し、彼の講演や「不都合な真実」での環境啓蒙活動が評価され、IPCCと一緒に2007年ノーベル平和賞を受賞したのだった。

2009年11月３日には、『不都合な真実』の続編『われわれの選択』（Our Choice: A Plan

to Solve the Climate Crisis）を発表した。『不都合な真実』から丁度10年目の2017年に、世界情勢も大きく変わる中、ゴアのその後の活動を追った『不都合な真実２ 放置された地球』（An Inconvenient Sequel: Truth to Power）が公開された。気候変動問題に取り組むアル・ゴア元米国副大統領を中心に、2016年のパリ協定調印までの道のりに焦点が当てられた。温暖化の国際ルールの決議に至ったパリ協定への困難な道筋や、その後のトランプ大統領の対策を取りやめる動きなど、必ずしも順調には進んでいないその後の地球温暖化に対する彼の「戦い」を、激動する世界の情勢を織り込みながら描いている[34]。

前節最後に言及したように、2011年３月11日の福島第一原発事故以来、核兵器ではないものの「フクシマ」と英語で世界中から呼ばれるほど、原発事故がもたらした環境破壊は、解決の道筋さえ見えていない。そんな日本で、原発再開を唱える政治家がいるばかりか、世界中に原子力発電所建設の営業をする首相の状況を、どう解釈すればよいのか。憂うだけではすまない、由々しき事態である。

ノーベル平和賞が、国際紛争解決や人権擁護活動への貢献ばかりか、21世紀にはその対象を環境保護分野にまで拡大した意味と意義の大きさを、世界で唯一の被爆国である日本は、もっと真剣に考えなければならない。市井の人はもちろん、政治に携わる人々の意識の低さは、そのまま世界からの日本の評価につながる。そうした政治家を選んでいる有権者の責任である。筆者が外国史を講義し始めた30年前は、選挙権は二十歳からだったので、短大生には「二十歳になったら必ず選挙に行く」よう促していた。

2015年６月17日に交付され、翌2016年同日から施行となった改正公職選挙法は、18歳選挙権を実現した。すでに３年目を迎え、教室に座る大学生は全員有権者となった。外国史の講義ばかりか、英語やゼミにおいても、筆者は学生に投票を促している。どの政党、あるいはどの政治家かは自分で決めるべきだが「誰に入れていいかわからない」を繰り返す彼らには「選挙公報」を読めば政治家の考え方や姿勢がわかるから「ベストがいなければベターを選んで、必ず投票に行きなさい！」と話してきた。

特に女子大生には「先輩たちの血と汗の結晶の選挙権を無駄にしないで！」と力説した。わずか74年前、1945年12月に衆議院議員選挙法が改正され、女性の国政参加が認められ、1946年４月衆院選が女性にとって初の投票権行使となった。同年11月に公布された日本国憲法に参政権が明記され、1947年４月の第１回参院選を迎えたことを説明し、市川房枝や加藤シヅエたち「先輩」の長年の努力を伝えてきた。まずは選挙へ行くことから始まることは、筆者が常に学生に伝えてきたことだった[35]。

21世紀の大きな課題の一つ、環境問題はそのまま政治問題でもある。学生たちが世界のことを考えるとき、目の前の政治を凝視することが出発点だと伝え続けなければならない。

４．おわりに

「歴史は暗記」という間違った考え方の学生たちに、「現在の問題解決のために歴史を学ぶことが必要」という姿勢で外国史（アメリカ史）を30年間講義してきた筆者は常に、現在進

行形の世界の諸問題に向き合ってきた。そのため、本稿ではその「途中経過」しか提示できていない。本稿での問題提起は、さらに世界の現状の動きを凝視しながら解決の道を探っていくことになる。

本論文執筆当初には第４章「外国史から読み解く21世紀」として一章で三節を考えていたが、時間切れとなり、当初の予定第４章第３節「環境破壊防止のゆくえ」のみを第３章第４節として組み込んだ。第１節と第２節は、拙著『スクリーンに投影されるアメリカ』を発展させた内容になるはずだったが、それはいずれの拙著[36]で実現したい。すでに筆者のHP「岩本裕子（ひろこ）研究室」では、外国史コラムを設けて３回分連載を終えている。詳細はHPに委ねたい[37]。

外国史学習が、何のためになされなければならないのか、その学習の到達点がどこなのか、すでに本稿で議論してきた通りである。大学教育は、他者理解のための教養や知識を身につけ、異文化を受け入れ、理解するための下地作りでなければならない。他者を理解することは、そのまま自分自身が何者かを知る一歩になるはずである。人はその命がなくなるまで、自分が何者かを追求し続ける生き物だと筆者は考える。

自分探しのために学び、考え、行動する、その最も近道が外国史学習である。他者理解は、実は自分理解であり、懐深く他者を受け入れられるかどうか、それは個人の学習度合いに比例するだろう。多くの異文化を理解しようと学習し、異なる他者に左右されない自分自身を育てていく、育つからこそ他者をも受け入れられるようになる。懐の深さとはそういう意味である。外国史学習が、自分探しの道標になることを確信する。

本稿は、筆者が1990年以来大学教壇で30年間歴史を講義してきた講義ノートの一部を活字化したようなものである。この30年間、時代の動きと共に世界で今何が起こっているのか、女性や子どもがどういう状況に置かれているのかを学生に知らせ、啓発してきた記録の一端である。世界は20世紀最後の10年から21世紀へ、日本は平成から令和へ、と時々刻々と動いていく。その有り様を女性と子どもの視点から凝視し、大学教壇で発信し続けていきたい。１年後には、１冊の書籍として完成させ、学生へは講義教科書として提示する予定である。本稿はその出発点であり、「試作」となった。

本研究は、JSPS科研費基盤研究（Ｂ）一般　課題番号　17H02409　課題名「共鳴かつ葛藤する闘争―公民権運動の相対化による1960年代の社会的分析―（研究代表者：岩本裕子）」の助成を受けたものである。

註

［1］岩本裕子『スクリーンで旅するアメリカ』（メタ・ブレーン、1998年初版、2002年重版）

［2］岩本裕子「大学における英語教育再考：こども学部英語科目を手がかりに」『浦和論叢』第41号、2009年８月、pp.51-81. 以下がリポジトリURLである。
file:///C:/Users/iwamoto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/3H1OBTGT/urawaronso_041_051-081.pdf

［3］「高大連携歴史教育研究会」の公式HPは以下である。http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/

［4］油井大三郎「転換期の歴史教育と東アジアの歴史対話」『世界』岩波書店、2019年３月号、pp.208-216.

［5］岩本裕子「西洋精神の起源をめぐる一考察：映像に描かれた聖書・神話・伝説」『浦和論叢』第38号、2008年３月、pp.25-47.
file:///C:/Users/iwamoto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/SXRBJSMF/urawaronso_038_025-047.pdf

［6］文部科学省高等学校学習指導要領（地理歴史科）
www.mext.go.jp/component/a.../1407073_03_1.pdf

［7］この車内広告を出した中学入試進学塾のHPでは、以下のような解答と解説がなされていた。
https://www.nichinoken.co.jp/shikakumaru/201903_sh/

解答例

例１：途上国の小規模農家には飢餓で苦しむ人も多いことを伝え、支援方法としてフェアトレード運動を紹介する。（49文字）

例２：日本から出る大量の食品ロスやその原因を伝え、食品ロス削減のために自分ができる取り組みを考えてもらう。（50文字）

解説

飢餓に苦しむ人を減らし、世界中のすべての人が十分かつ適切な食糧を手に入れられる状態をつくるためには、大きく２つのアプローチがあります。１つは、飢餓が起こっている国や地域を支援する方法です。そしてもう１つは、飽食で大量の食品ロスを生んでいる自分たちの社会を見直すことで、世界の食糧配分のバランスを変えていく方法です。（中略）問題に込められているメッセージが印象的でした。問題の前半は、世界では９人に１人が飢餓に苦しんでいることや、５歳未満でなくなる子どもの約半数が栄養不良であることが書かれています。この問題文を読んだ受験生には、「世界全体でみると、飢餓は決してめずらしいことではないのだ」という危機意識が芽生えたことでしょう。飢餓の深刻さを知ることは、解決すべき食糧問題を具体的に想像する際の手助けになります。言い換えると、「国連の食糧問題の担当者」という未知の立場に、受験生が自分自身を置くためのステップになっているともいえます。（中略）今、世界が抱える問題の多くは、一部の国や地域だけのものではなく、世界各国が互いに協力し合わないと解決できないものへと変化しています。そのため、国家間で協力体制を築くことはもちろん、同じ地球にくらす一人ひとりの意識も大切になっています。「国連の食糧問題の担当者」という設定には、これからの国際社会を生きる一人として、当事者意識を持ちながら、世界の問題にかかわり続けてもらいたいという中学校のメッセージが込められているのではないでしょうか。

［8］国連世界食糧計画のHPは以下である。
http://ja.wfp.org/about/；https://ja1.wfp.org/zero-hunger

［9］https://www.unicef.or.jp/partner/kuroyanagitetsuko/partner_act.html

［10］紙幅がなく本文で言及できなかったことを註に残す。イスラム世界に生きる女性の中には女性性

器切除（FGM：Female Genital Mutilation）という「風習」を受けている人々がいる。発生の起源は不明だが、2000年以上も前に中東からアフリカ大陸に広まった「慣習」と言われる。毎年200万人、一日に直すと6000人の少女が犠牲になっていることになる。FGMが西欧世界に周知されるきっかけは、アメリカ黒人女性作家、アリス・ウォーカーが1992年に書いた小説『喜びの秘密』（*Possessing the Secret of Joy*）さらに1993年に彼女自身が制作した映像『戦士の刻印／女性性器切除の真実』（Warrior Marks）であった。この映像は1994年にカイロで開催された国連国際人口・開発会議で上映され注目されたのだった。以下の拙稿を参照されたい。「シスターフッドとアフリカへの想い［戦士の刻印―女性性器切除の真実（1994）］」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）pp.98-105；「逃げ出すことのできないイスラム世界の女性たち」『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレーン、2003年）pp.203-205.

［11］黒柳徹子『トットちゃんとトットちゃんたち－1997-2014－』（講談社、2015年）pp.4,6-7（まえがき），299-300（第15章）．1998年から2014年まで『しんぶん赤旗日曜版』掲載記事を単行本化したものである。本文で説明したとおり『トットちゃんとトットちゃんたち』も同様の経緯で、1997年に講談社から単行本化、2001年には文庫化もされた。

［12］https://www.unicef.or.jp/osirase/back2009/0905_13.htm　（2009年５月20日）

［13］「世界の女性議員割合 国別ランキング・推移」データ更新日2019年３月19日
https://www.globalnote.jp/post-3877.html

［14］マララ・ユスフザイに関する説明は、以下を参考にした。本稿末に【項目別参考文献】としても列挙した。マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム著、金原瑞人、西田佳子訳『わたしはマララ：教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』（学研パブリッシング、2013年）；マララ・ユスフザイ［述］石井光太『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか：マララ・ユスフザイさんの国連演説から考える』（ポプラ社絵本、2013年）；マララ・ユスフザイ、パトリシア・マコーミック著、道傳愛子訳『マララ：教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』（岩崎書店、2014年）；宮田律『ナビラとマララ：「対テロ戦争」に巻き込まれた二人の少女』（講談社、2017年）

［15］https://www.plan-international.jp/news/girl/20190319_15127/「プラン・インターナショナル」の歴史説明が以下のサイトで紹介されているので、ここに抜粋しておく。
https://www.plan-international.jp/about/history/
1937年「スペインの子どものためのフォスター・ペアレンツ・プラン委員会」として創立。スペイン内戦の戦災孤児を支援。1940年代第二次世界大戦中に「戦時下の子どものためのフォスター・ペアレンツ・プラン」へ改称し、ヨーロッパ全土の子どもたちが支援対象となる。1950年代ヨーロッパの復興にともない、活動地域を途上国に移す。名称も「フォスター・ペアレンツ・プラン」へ1960年代アジアと南米にも活動を広げる。1962年ジャクリーン・ケネディ米大統領夫人が役員となる。1970年代「フォスター・プラン」として、アジア・アフリカ・中南米で活動1980年代ヨーロッパ諸国が次々と支援国に加わり、1983年には日本でも事務所を設立。1989年開発援助を行う民間団体として国連に正式に公認・登録される。1990年代創立60周年を迎え、北欧諸国や韓国が支援国に加わる。1998年以降には大人だけでなく子どもの視点や意見を中心とする「子どもとともに進める地域開発」を世界中で実践。2000年代2002年の国際理事会にて、プランは「子どもとともに地域開発を進める国際NGO」であると宣言。これにともない、組織名は「プラン」に、支援者の呼称は「フォスター・ペアレント」から「スポンサー」に変更される。香港、インド、コロンビアも支援国事務所としての活動を開始し、支援国は21カ国に拡大2012年女の子の生きる力を支援する「Because I am a Girlキャンペーン」を開始。2016年団体名称を「プラン・インターナショナル」へ変更。

[16]「世界トイレの日（world toilet day）」[編集部]『日本大百科全書（ニッポニカ）』電子辞書
[17]「マララさん『女子教育に投資を』＝初来日、東京都内で講演」時事ドッドコムニュース（2019年03月23日15時23分）https://www.jiji.com/jc/article?k=2019032300423&g=int；マララの動画配信サイトは以下。http://www.at-douga.com/?p=10595
[18]「ルワンダ虐殺の追悼式：ヘイトスピーチや扇動の果ての悲劇を刻む」（2019. 4 . 12）
https://globe.asahi.com/article/12284897
[19] 中満泉『危機の現場に立つ』（2017年、講談社）；http://news.kodansha.co.jp/20170712_b02；「2017年８月９日現代ビジネス（講談社）」https://gendai.ismedia.jp/articles/-/52545
[20] https://www.unhcr.org/jp/angelina_jolie；Angelina Jolie, *Notes from my travels：visits with refugees in Africa, Cambodia, Pakistan, and Ecuador,* New York: Pocket Books, 2003；アンジェリーナ・ジョリー（中西絵津子訳）『思いは国境を越えて』（産業編集センター、2003年）
[21]「ノーベル平和賞」https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%99%E3%83%AB%E5%B9%B3%E5%92%8C%E8%B3%9E（2019年３月13日閲覧）
[22] アンゲリーカ・U・ロイッター、アンネ・リュッファー著、松野泰子、上浦倫人訳『ピース・ウーマン：ノーベル平和賞を受賞した12人の女性たち』（英治出版、2009年）
[23] #ME TOO運動に関しては以下の第５節 セクハラという暴力#Me Tooを参照されたい。拙稿「アメリカ映画の『暴力』性：時代を映す『鏡』としてのハリウッド映画」『季論21』2018年７月号、pp.170-181.
[24]「性的暴力ならぬ『性的テロリズム』～レイプ・サバイバーの治療専門家の闘い～」米川正子元UNHCR職員、立教大学特任准教授（2013年11月13日）
https://iwj.co.jp/wj/open/archives/111385
[25] 城石裕幸「武器としての性暴力『これは性的なテロリズムなのです！』～コンゴ東部で４万人以上の性暴力被害者を治療するデニ・ムクウェゲ医師が語る『性暴力・鉱物資源・グローバル経済』の関係とは⁉」（2016年10月４日）
https://iwj.co.jp/wj/open/archives/335956
[26] アマル弁護士の夫はハリウッド俳優のジョージ・クルーニーだと説明した方が耳目を集めるかもしれない。時事に無関心な人にも、アンジェリーナ・ジョリーが親善大使になると難民に興味を持つと同様、アマル弁護士の活躍が夫の名声で興味を持たれるなら、それなりの効果はある。夫の名声以上に意識高い仕事をするアマル弁護士の存在が、一人でも多くの人々に世界中で起こっている「武器としての性暴力」周知に貢献するなら意味はある。
[27]「性奴隷にされた難民女性が国連親善大使に『ジェノサイドが起きている』とアマル・クルーニー弁護士」（2016年９月23日）
https://www.buzzfeed.com/jp/sakimizoroki/amal-and-nadia-at-unga
[28] Cover page "Pressing issue", *Asahi Weekly*（2019／４／14）
[29] ナディア・ムラド、ジェナ・クラジェスキ（吉井智津訳）『THE LAST GIRL― イスラム国に囚われ、闘い続ける女性の物語』（東洋館出版社、2018年11月）
[30] 池上彰＋「池上彰緊急スペシャル！」制作チーム『世界から核兵器がなくならない本当の理由』（SB新書、SBクリエイティブ、2018年）p.171.
[31] 以下拙稿の一部に加筆修正した。「オバマ バラク・フセイン」『増補新版 アメリカ大統領物語』（新書館、2017年）pp.190-195.；岩本裕子（ひろこ）研究室映画コラム連載第４回「年始に考える：ポピュリズムと向き合うためにできること」映画『パール・ハーバー』
http://www.urawa.ac.jp/~iwamoto/filmcolumn/pearl-harbor.html

[32]「原爆『残り火』、法王が消した」『朝日新聞』2019年３月22日朝刊；ローマ教皇庁（バチカン）が2017年末に教会関係者に向け、1945年に原爆投下を受けた後の長崎で撮影された写真（「焼き場に立つ少年」）入りのカードを配布した。フランシス教皇が配布するよう命じたもので、教会関係者によると教皇が年末にカードを配布するのは異例で、「核なき世界」を訴えてきた教皇からの強いメッセージと受け止められている。『朝日新聞』2018年１月３日

[33] 池上彰『ノーベル平和賞で世の中がわかる』（マガジンハウス、2012年）pp.47-49.；ワンガリ・マータイ『もったいない』（プラネット・リンク）

[34]「元副大統領アル・ゴアの告発～“不都合な真実”はいま～」NHKクローズアップ現代＋2017年11月16日（木）放送　https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4065/

[35] 岩本裕子（ひろこ）研究室映画コラム連載第９回「『沈黙』と『ハクソー・リッジ』：まずは選挙に行きましょう！」（2017／６／30）
http://www.urawa.ac.jp/~iwamoto/filmcolumn/hacksaw-ridge.html

[36] 2020年４月単著出版を目標に、出版社メタ・ブレーンと企画を進めている。本学の講義「歴史入門」前半部分（アメリカ大陸へ渡るヨーロッパの人々に根ざした文化三種：旧約聖書・ギリシャ神話・ケルト伝説）及び非常勤科目「女性と現代特論」（2019年度で29年目、しかも募集停止のため最終年となる青山学院女子短期大学で、現代教養科改組以降７年間担当した科目）の講義内容を一冊の本にする予定である。後者については、本論文での展開がすでにその「果実」であり、新著作の模索と共に「試作」ともなっている。

[37] 岩本裕子（ひろこ）研究室外国史コラム連載第１回「古代ギリシャ・ローマへの旅」（2018／５／４）
http://www.urawa.ac.jp/~iwamoto/history/roads_to_rome.html
外国史コラム連載第２回「イスラム教の長兄はユダヤ教、次兄はキリスト教」（2019／２／12）
http://www.urawa.ac.jp/~iwamoto/history/islamic-jewish-christ.html
外国史コラム連載第３回「クリスマスとイースターの意味を知って祝っている？キリスト教の聖典『新約聖書』を映画で観る」（2019／３／10）
http://www.urawa.ac.jp/~iwamoto/history/christmas-easter.html

[項目別参考文献（絵本含む）及び映像]

[ユニセフ親善大使関連]

・黒柳徹子『窓際のトットちゃん』（講談社、1981年）
・黒柳徹子『窓際のトットちゃん』新組版（講談社文庫、2015年）
・黒柳徹子『トットちゃんとトットちゃんたち』（講談社、1997年）
・黒柳徹子『トットちゃんとトットちゃんたち』（講談社青い鳥文庫、2001年）
・黒柳徹子『トットちゃんとトットちゃんたち：1997-2014』（講談社、2015年）

[マララ関連]

・マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム著、金原瑞人、西田佳子訳『わたしはマララ：教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』（学研パブリッシング、2013年）
・マララ・ユスフザイ［述］石井光太『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか：マララ・ユスフザイさんの国連演説から考える』（ポプラ社絵本、2013年）
・マララ・ユスフザイ、パトリシア・マコーミック著、道傳愛子訳『マララ：教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』（岩崎書店、2014年）
・宮田律『ナビラとマララ「対テロ戦争」に巻き込まれた二人の少女』（講談社、2017年）

・ローズマリー・マカーニー、ジェン・オールバー、国際NGOプラン・インターナショナル 文、西田佳子訳『わたしは女の子だから 世界を変える夢をあきらめない子どもたち』（西村書店、2019年３月16日刊行）
・「16歳 不屈の少女マララ・ユスフザイ」NHKクローズアップ現代、2014年１月８日放送
・デイヴィス・グッゲンハイム監督ドキュメンタリー「わたしはマララ」原題 He Named Me Malala 2015年劇場公開、本編88分

［UNHCR関連］
・緒方貞子『私の仕事－国連難民高等弁務官の十年と平和の構築』（草思社、2002年）
・緒方貞子『紛争と難民 緒方貞子の回想』（集英社、2006年）
・緒方貞子『私の仕事－国連難民高等弁務官の十年と平和の構築』（朝日文庫、2013年）
・緒方貞子『聞き書 緒方貞子回顧録』（岩波書店、2015年）
・中満泉『危機の現場に立つ』（講談社、2017年）
・アンジェリーナ・ジョリー（中西絵津子訳）『思いは国境を越えて』（産業編集センター、2003年）

［ノーベル平和賞関連］
・青山薫、石原みき子、松本真紀子『もうひとつのノーベル平和賞：平和を紡ぐ1000人の女性たち』（金曜日、2008年）
・アンゲリーカ・U・ロイッター、アンネ・リュッファー著、松野泰子、上浦倫人訳『ピース・ウーマン：ノーベル平和賞を受賞した12人の女性たち』（英治出版、2009年）
・池上彰『ノーベル平和賞で世の中がわかる』（マガジンハウス、2012年）
・アル・ゴア著、枝廣淳子訳『不都合な真実』（ランダムハウス講談社、2007年）

［「武器としての性暴力」関連］
・米川正子「性的暴力ならぬ『性的テロリズム』～レイプ・サバイバーの治療専門家の闘い～」（2013年10月末日）https://iwj.co.jp/wj/open/archives/111385
・城石裕幸「武器としての性暴力『これは性的なテロリズムなのです！』～コンゴ東部で４万人以上の性暴力被害者を治療するデニ・ムクウェゲ医師が語る『性暴力・鉱物資源・グローバル経済』の関係とは⁉」（2016年10月４日）
https://iwj.co.jp/wj/open/archives/335956
・秋林こずえ「世界の紛争下における性暴力の課題」*Gender Forum*,18, pp.65-70.（2016）立教大学ジェンダーフォーラム年報第18号（2017年３月発刊）第68回ジェンダーセッション
・ナディア・ムラド、ジェナ・クラジェスキ著（吉井智津訳）『THE LAST GIRL― イスラム国に囚われ、闘い続ける女性の物語』（東洋館出版社、2018年）

［核兵器関連］
・池上彰＋「池上彰緊急スペシャル！」制作チーム『世界から核兵器がなくならない本当の理由』（SB新書、SBクリエイティブ、2018年）
・鈴木達治郎、光岡華子『こんなに恐ろしい核兵器１ 核兵器はこうしてつくられた』（ゆまに書房、2018年12月）
・鈴木達治郎、光岡華子『こんなに恐ろしい核兵器２ 核兵器のない世界へ』（ゆまに書房、2019年１月）

［付録：2017年ノーベル平和賞受賞（サーロー節子）スピーチ全文］

「核兵器は必要悪ではなく絶対悪」2017年12月10日23時08分 朝日新聞DIGITAL

https://www.asahi.com/articles/ASKDB4H8VKDBUHBI008.html

皆さま、この賞をベアトリスとともに、ICAN運動にかかわる類いまれなる全ての人たちを代表して受け取ることは、大変な光栄です。皆さん一人一人が、核兵器の時代を終わらせることは可能であるし、私たちはそれを成し遂げるのだという大いなる希望を与えてくれます。

私は、広島と長崎の原爆投下から生き延びた被爆者の一人としてお話をします。私たち被爆者は、70年以上にわたり、核兵器の完全廃絶のために努力をしてきました。

私たちは、世界中でこの恐ろしい兵器の生産と実験のために被害を受けてきた人々と連帯しています。長く忘れられてきた、ムルロア、インエケル、セミパラチンスク、マラリンガ、ビキニなどの人々と。その土地と海を放射線により汚染され、その体を実験に供され、その文化を永遠に混乱させられた人々と。

私たちは、被害者であることに甘んじていられません。私たちは、世界が大爆発して終わることも、緩慢に毒に侵されていくことも受け入れません。私たちは、大国と呼ばれる国々が私たちを核の夕暮れからさらに核の深夜へと無謀にも導いていこうとする中で、恐れの中でただ無為に座していることを拒みます。私たちは立ち上がったのです。私たちは、私たちが生きる物語を語り始めました。核兵器と人類は共存できない、と。

今日、私は皆さんに、この会場において、広島と長崎で非業の死を遂げた全ての人々の存在を感じていただきたいと思います。皆さんに、私たちの上に、そして私たちのまわりに、25万人の魂の大きな固まりを感じ取っていただきたいと思います。その一人ひとりには名前がありました。一人ひとりが、誰かに愛されていました。彼らの死を無駄にしてはなりません。

米国が最初の核兵器を私の暮らす広島の街に落としたとき、私は13歳でした。私はその朝のことを覚えています。８時15分、私は目をくらます青白い閃光（せんこう）を見ました。私は、宙に浮く感じがしたのを覚えています。

静寂と暗闇の中で意識が戻ったとき、私は、自分が壊れた建物の下で身動きがとれなくなっていることに気がつきました。私は死に直面していることがわかりました。私の同級生たちが「お母さん、助けて。神様、助けてください」と、かすれる声で叫んでいるのが聞こえ始めました。

そのとき突然、私の左肩を触る手があることに気がつきました。その人は「あきらめるな！　（がれきを）押し続けろ！　蹴り続けろ！　あなたを助けてあげるから。あの隙間から光が入ってくるのが見えるだろう？　そこに向かって、なるべく早く、はって行きなさい」と言うのです。私がそこからはい出てみると、崩壊した建物は燃えていました。その建物の中にいた私の同級生のほとんどは、生きたまま焼き殺されていきました。私の周囲全体にはひどい、想像を超えた廃虚がありました。

幽霊のような姿の人たちが、足を引きずりながら行列をなして歩いていきました。恐ろしいまでに傷ついた人々は、血を流し、やけどを負い、黒こげになり、膨れあがっていました。体の一部を失った人たち。肉や皮が体から垂れ下がっている人たち。飛び出た眼球を手に持っている人たち。おなかが裂けて開き、腸が飛び出て垂れ下がっている人たち。人体の焼ける悪臭が、そこら中に蔓延（まんえん）していました。

このように、一発の爆弾で私が愛した街は完全に破壊されました。住民のほとんどは一般市民でしたが、彼らは燃えて灰と化し、蒸発し、黒こげの炭となりました。その中には、私の家族や、351人の同級生もいました。

その後、数週間、数カ月、数年にわたり、何千人もの人たちが、放射線の遅発的な影響によって、次々と不可解な形で亡くなっていきました。今日なお、放射線は被爆者たちの命を奪っています。

広島について思い出すとき、私の頭に最初に浮かぶのは４歳のおい、英治です。彼の小さな体は、何

者か判別もできない溶けた肉の塊に変わってしまいました。彼はかすれた声で水を求め続けていましたが、息を引き取り、苦しみから解放されました。

私にとって彼は、世界で今まさに核兵器によって脅されているすべての罪のない子どもたちを代表しています。毎日、毎秒、核兵器は、私たちの愛するすべての人を、私たちの親しむすべての物を、危機にさらしています。私たちは、この異常さをこれ以上、許していてはなりません。

私たち被爆者は、苦しみと、生き残るための、そして灰の中から生き返るための真の闘いを通じて、この世に終わりをもたらす核兵器について世界に警告しなければならないと確信しました。くり返し、私たちは証言をしてきました。

それにもかかわらず、広島と長崎の残虐行為を戦争犯罪と認めない人たちがいます。彼らは、これは「正義の戦争」を終わらせた「よい爆弾」だったというプロパガンダを受け入れています。この神話こそが、今日まで続く悲惨な核軍備競争を導いているのです。

９カ国は、都市全体を燃やし尽くし、地球上の生命を破壊し、この美しい世界を将来世代が暮らしていけないものにすると脅し続けています。核兵器の開発は、国家の偉大さが高まることを表すものではなく、国家が暗黒のふちへと堕落することを表しています。核兵器は必要悪ではなく、絶対悪です。

今年７月７日、世界の圧倒的多数の国々が核兵器禁止条約を投票により採択したとき、私は喜びで感極まりました。かつて人類の最悪のときを目の当たりにした私は、この日、人類の最良のときを目の当たりにしました。私たち被爆者は、72年にわたり、核兵器の禁止を待ち望んできました。これを、核兵器の終わりの始まりにしようではありませんか。

責任ある指導者であるなら、必ずや、この条約に署名するでしょう。そして歴史は、これを拒む者たちを厳しく裁くでしょう。彼らの抽象的な理論は、それが実は大量虐殺に他ならないという現実をもはや隠し通すことができません。「核抑止」なるものは、軍縮を抑止するものでしかないことはもはや明らかです。私たちはもはや、恐怖のキノコ雲の下で生きることはしないのです。

核武装国の政府の皆さんに、そして、「核の傘」なるものの下で共犯者となっている国々の政府の皆さんに申し上げたい。私たちの証言を聞き、私たちの警告を心に留めなさい。そして、あなたたちの行動こそ重要であることを知りなさい。あなたたちは皆、人類を危機にさらしている暴力システムに欠かせない一部分なのです。私たちは皆、悪の凡庸さに気づかなければなりません。

世界のすべての国の大統領や首相たちに懇願します。核兵器禁止条約に参加し、核による絶滅の脅威を永遠に除去してください。

私は13歳の少女だったときに、くすぶるがれきの中に捕らえられながら、前に進み続け、光に向かって動き続けました。そして生き残りました。今、私たちの光は核兵器禁止条約です。この会場にいるすべての皆さんと、これを聞いている世界中のすべての皆さんに対して、広島の廃虚の中で私が聞いた言葉をくり返したいと思います。「あきらめるな！　（がれきを）押し続けろ！　動き続けろ！　光が見えるだろう？　そこに向かってはって行け」

今夜、私たちがオスロの街をたいまつをともして行進するにあたり、核の恐怖の闇夜からお互いを救い出しましょう。どのような障害に直面しようとも、私たちは動き続け、前に進み続け、この光を分かち合い続けます。この光は、この一つの尊い世界が生き続けるための私たちの情熱であり、誓いなのです。

Summary

Purpose and Significance of Foreign History Learning
— from the weak（children and women）point of view —

Hiroko Iwamoto

Japanese people are apt to think that history-learning means only just memorizations of the matters, that is, names of the historical famous people and places, the events and incidents. Educating the history means how we must think nowadays. History is the most important keys for solving the problems in the 21st century. Key words for them are as follows: the weak that is children and women, and Nobel Peace Prize.

It is necessary for the young generation to think about not only themselves but also the whole world. In order to do so, they must know about the real condition of the world, for example, refugees around the world and the contribution of UNHCR.

Keywords　foreign history learning, the weak（children and women）, Nobel Peace Prize, UNHCR

（2019年４月５日受領）